
Devinette

水無月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Deviette

【Nコード】

N7193J

【作者名】

水無月

【あらすじ】

ごく普通の女子高生の愛良と、ミステリー好きの幼馴染の匠。幼馴染以上恋人未満な二人の、クイズを交えたちょっぴり甘い短編集。

問題編と解決編からなる一話読みきり形式。

第一話・お花見へ問題編

「つまんない」

窓から散る桜を眺めつつ、私は不服気につぶやいて、隣で小説を読んでいる幼馴染を半眼で軽く睨む。

私、橘 愛良 たちばな あいら 17歳。ごく普通の女子高生。

「つまらないなら楽しい事でもすれば？」

本から目を上げずそっけなく答えたこの男は、横溝 匠 よこみぞ たくみ。

ミステリーマニアな16歳。私の父がひらいている探偵事務所で、何かミステリー好きの血が騒ぐような事件はないかと暇があれば居座っている。実際そんな事態はめったにないのでいつもミステリー小説を読みふけているだけなのだけど…。

「…公園にお花見行きたいんだけどな」

ねだるような声を出すと、匠はほんの少し目線を上げ私を見た。

「それは、一緒に行ってほしいと言ってるのかな？」

相変わらず口のきき方がかわいくない。

「だって匠、暇そうじゃない」

「愛良みたいに暇だから本を読んでるんじゃないで、俺は読みたいから時間を作って読んでもらうだけだね。どうしてもというなら花見に付き合ってもいいけど？」

匠から折れてくれることはないとわかっていても、私も『じゃあ、一緒に行つて！』と言えるほど素直でかわいくもない。

ぷうつとふくれたまま黙り込む。

そんな私を見て匠は本を閉じる。

「じゃあ、簡単なクイズに答えられたらいっしょにいつてあげよう。受けて立つ？」

そう言つて不適に微笑まれたら受けて立つしかない。

「いいわよ。受けて立とうじゃないの！」

「それでは、問題。」

『うに』は『犬』・『秋』は『イカ』・『イクラ』は『歩き』

では、『アリア』は？」

「アリア？」

「オペラなどで歌われる曲だよ」

「へえ……」

それが分かった所で、クイズの答えはさっぱりわからない。
必死に頭をフル回転させてみる。

「共通点は、すしネタ？？」

とたんに匠は腹を抱えて笑い出す。

「なによー！」

「いや、ねらった訳じゃないけど確かにそうだ。けど関係ないね」

「ヒントは？」

「もう訊くの？簡単なのに根性無いな。…そうだな、『赤坂』は『赤坂』ってのがヒントかな」

むう？？赤坂が赤坂？؟؟？

私が考え込んでいると、匠は何か思いついたかのようにいたずらな笑みを浮かべてこう言った。

「ちなみにこの答えは、俺の好きなものだよ」

第一話・お花見へ解答編

「こーゆーのは、法則を見つけるのよね？」

匠が再び小説に目を通しながら、私の独り言にうなずいてみせる。

「共通点は…2文字なら2文字、3文字なら3文字って事？」

再びうなずく匠。

「で、赤坂は赤坂なんでしょ？これは変わらない」
うーむ。

「うにが犬で秋がイカでいくらが歩き？」

んーーーーー????

頭を悩ませていると、突然私の携帯がなった。友達からのメール。
すぐにメールを打ち返していてふと気付く。

「アルファベット…？」

そうつぶやくと、匠は微笑んだ。

そういえば前に匠が暗号について蘊蓄を色々述べていてときに、
言っていた気がする。

ひらがなやローマ字に文を書き換えてみると見えてくるものもあるって。

私はメモ用紙を持ってきて、問題をローマ字で書いてみる。

「えっと、

UNIがINUで、AKIがIKA、IKURAがARUKI。A
KASAKAがAKASAKA…。

あっ！！」

答えが見えたー！！

「匠！わかった！！ローマ字で書いて反対から読むんだ！！！」

「正解。では、『アリア』は？」

匠は小説を閉じ、意味ありげに笑いながら私を見る。

私は再びメモ用紙に書く。

『A R I A』を逆にすると『A I R A』。

A I R A って愛良？私の事？

そして、先ほど匠が最後に出したヒントを思い出す。

《答えは俺の好きなものだよ》

「……！！！」

かあっと赤くなる私を見て、匠はたまらずに笑い出す。

「愛良っておもしれえ……」

「ちよっ……よくもからかってくれたわね！！！」

「せっかくの読書の時間を中断するんだからね、楽しませていただかないと」

「なっ……」

怒ろうとする私を尻目に、匠はさっさと扉に向かう。

「早く行かないと日が暮れるぜ。夜桜見物にはまだ寒い」

そう言って笑って手を差し伸べる匠を見て、私の怒りも霧散していく。

結局、最初から一緒に行ってくれる気だったんだよね。ちよっとひねくれてるだけでさ。

「じゃー、途中でおやつ買ってこー！」

「はいはい」

しょうがないなって顔をしながらいつも一緒にいてくれる匠。

私も暗号考えて《好きなものだよ》って言ってみようかな。

第二話・けんかへ問題編

探偵事務所のドアをそつと開き、いつも我が物顔で読書をしているはずの人物がいないのを確認すると、私、橘 愛良は深い溜息をついた。

これで10日目…。

一緒に買い物に行った時に喧嘩をしてから、横溝 匠は毎日来ていた事務所に顔を出さないばかりか、学校でもさりげなく私をさけていた。

素直に謝れない私が悪いんだけど、そこまでしなくなつて…。

私は鞆から携帯を出して、匠からのメールがないのを確かめると再び溜息をついた。

今朝『まだ怒ってる?』とメールを出したのに、夕方の今になつても返事がないなんてやっぱり怒ってるのかなあ…。

「ふふっ」

思わずこぼれたといった笑い声に私が目を向けると、事務員のマミさんが私を見て微笑んでいる。

「匠君なら、さつき応接室に何か置いてでかけたわよ」

「ほんと!？」

ダッシュで応接室に駆け込み、部屋を見回すと、テーブルの上に一枚の紙があるのが見えた。

私はソファ―に腰をかけ、その紙を手を取った。

+++++

愛良へ

次の暗号を解読せよ

りかいつくかえのいかしたいをかみかりよ

ヒントは「メールの返事」

匠

+++++

「なに。これ…」

10日ぶりのコミュニケーションが暗号って……匠らしいけどね。しかし、意味不明の言葉の羅列を見ても、なんのことだかさっぱりわからない。

メールの返事がヒント…。

「今日のメールの返事だよね…」

「そうだよ」

思わず言った独り言に返事がかえってきて、私は驚いて振り返る。不敵な笑みを浮かべて、応接室の入り口に匠が佇んでいた。

「まだ解けてないの？簡単なのに」

「もう解けそうよっ！」

全然わからないけれど、挑戦的な匠の視線に思わず意地をはる。本当は久しぶりに話せて嬉しいのに、私ってほんとに素直じゃない。

「へえ。じゃあ、お手並み拝見」

匠は推理小説を取り出すと、入り口で立ったまま読み始めた。

もうっ、小説読めるくらい時間がかかるといいたいわけねっ！

私はぶつと頬を膨らみながら、再び手紙とにらめっこし始めた。

第二話・けんかへ解答編

暗号の蘊蓄は匠に散々聞かされている。

「この手の問題は、言葉を並び替えるとか、いらぬ言葉を取り除く…」

私の独り言に、匠は小説を読みながら頷いている。

「ヒントがメールの返事ってことは、怒ってないかの返事なんだから、『怒ってる』か『怒ってない』って事でしょ？」

で、言葉を取り除く暗号だとしたら、何かがないって言葉がヒントになるから返事は『怒ってない』…」

そう言ってちらつと匠を見ると、満足気に微笑んでいる。

小説に対してじゃなく、今の言葉の肯定ととっていいのかな？

「でも、暗号に『おこつて』って言葉はないしなあ…」

「日本語は同じ意味でもいろんな表現があるよな」

あくまで小説に対しての独り言のように、ヒントをくれる匠。

怒るの別の表現…。腹を立てる…むかつく…。

いやいや、暗号の中にある言葉で構成されているはずだから、その中の言葉を使わなきゃ。

『りかいつくかえのいかしたいをかみかりよ』

この中にある言葉で、おこると同じような意味の言葉…。

「あつ！わかった！！」

匠がパターンと小説を閉じた。

「で？暗号の答えは？」

「えーっと、ちよつと待って。怒ってない、つまり『怒り（いかり）はない』ってことよね。」

『りかいつくかえのいかしたいをかみかりよ』から『い』と『か』と『り』をぬくと…『つくえのしたをみよ』??」

私はしゃがんで手紙が置いてあったテーブルの下をのぞく。
そこには可愛く包装された小さな小箱…。

「ハッピーバースデー。愛良」

背後で、いつもより少し優しい匠の声。

振り返った私の顔を見て、匠は笑い出す。

「何？自分の誕生日も忘れてたわけ？」

驚きと嬉しさで、顔が真っ赤になっているのが自分でもわかった。

「だって…匠がずっと私の事さけてるからっ！」

「へえ、そんなに寂しかったんだ」

からかうような視線に、いつもなら言い返すところだが今日は思わず目が潤む。

嫌われたんじゃないかって不安だったから、匠らしい演出がものすごく嬉しかった。

匠はそんな私をみてくすくすと笑う。

「ちよつとは反省した？」

「すっごく反省した」

「よろしい」

満足気に頷いて、匠は私のほうへ歩み寄ってきた。

「開けてみなよ」

「…うん」

中から出てきたのは、この間の買い物で私が見とれていたネックス。
レス。

匠は興味なさそうに他のものを見てたから、気付いてないと思ったのに…。

「俺の観察力を甘く見るなよ」

そう言いながら、匠は私にネックスをつけてくれた。

「ありがと、匠」

「いつもそれだけ素直だといいいんだけどね」

「それはお互い様でしょ！」

顔を見合わせて、思わず笑い出す。

やっぱり、こうやって匠と言いつ合ってるのが落ち着くな。

「じゃ、お客さんが来ないうちにここでケーキ食べるか」

「わーい!!!」

暗号をおいた後に買いに行ったらしいケーキを、匠は応接室の外から持ってきてくれた。

ちよつと意地悪もするけど、やっぱり匠は優しいんだよね。

私の事も、ちゃんと見てくれるしさ。

匠の誕生日、私も匠が喜んでびっくりする演出、考えてみようかな？

第三話・クリスマススイヴへ問題編（前書き）

このお話は暗号に画像を使用しておりますので、挿絵をONにして
お読みください

第三話・クリスマスイヴへ問題編

今日はクリスマスイヴ。

私、橘 愛良は父の経営する探偵事務所で、幼馴染の横溝 匠が来るのをこっそりと待っていた。

匠は寒いの人ごみがどっちかというと嫌いだ。

去年のクリスマスイヴはそれを理由に外出を断られ、暇だったこの探偵事務所でささやかなパーティーをしただけ…。

今年こそは匠を外に連れ出してやる！！と、私は匠の好物を用意していた。

つまり、暗号。

待ち合わせの場所と時間を暗号にして置いておけば、きっとその場所に来てくれるはず…と、数週間前から頭を捻って暗号を考えたのだ。

> i 4 2 2 7 — 7 2 9 <

これを、いつも匠が勝手にくつろいでいる事務所の応接室に置いておいてある。

ヒントは私の名前だけど、匠の事だからきっとそんなの無くて簡単には解いてしまうだろう。

携帯の電源を切って待ち合わせの場所で待っていれば、きっと来てくれるはず…。

そう期待で胸を膨らませながら待っていると、匠が事務所の扉を開けて入ってきたので、私は家具の陰にひっそりと身を潜めた。

匠は室内を見回して私がないことを確認すると、推理小説を片手に応接室に入っていた。

匠が私のおいた暗号の紙を手にとったのを確認してから、私はこ

つそりと事務所を出た。

後は、暗号の場所で匠を待つだけ。

早く待ち合わせの時間になるのを楽しみに思いながら、私は走って家まで戻っていった。

第三話・クリスマスイヴへ解答編

恋人達で溢れかえっている待ち合わせ場所で、私は一人佇んでいた。

待ち合わせの時間まであと5分。

外は寒かったけど、なんだかわくわくしていて寒さは感じていなかった。

と、ふわつと背後から首に何かがかけられる。

「なんでこんな寒い時に、外で待ち合わせするかな」

匠が自分のマフラーを私に巻きながら、呆れたように呟いた。

「だって匠、こうでもしないと出かけてくれないじゃない」

「イルミネーションももう見たし、何も一番込んでる日じゃなくてもいいと思うけど？」

もうっ、ムードがわからない奴！！

でも、暖かい缶コーヒーをポケットから出して渡してくれる辺りが、相変わらず匠らしい素直じゃない優しさだと思う。

「暗号はすぐにわかった？」

「俺がわからないと思う？」

不敵に微笑むと、匠はポケットから暗号を取り出す。

「ヒントの愛良の名前から察すると、文字と星の数が同じで、星にも濁点があるということは、『』『』『』ひらがな』。

星の頂点が5つ、中の数字は10までって事は、

数字が『あかさたな』って横の列、

頂点の塗られた場所が『あいうえお』って縦の列。

で、あいらの『あい』の星が右回りに塗られてるって事は、一番上から右回りが順番。

で、それを元に訳すと、「こうえんのつりー、ろくじ」 だろ？」

「ご名答！」

必死に考えた暗号がものの見事に解かれて、悔しいような嬉しいような微妙な気分だ。

「ま、愛良のわりに、よく考えたよ」

小ばかにしているようにも聞こえるが、匠なりに褒めてくれているのがわかってちょっと嬉しくなる。

「匠のために、必死に考えたもの」

「そりゃ、どうも」

ふっと笑うと、匠は踵を返した。

「じゃ、帰るか」

「えー！ー！！このツリーはこれからがいいんじゃない！ー！」

さっさと帰ろうとする匠の袖を思わず掴む。

この公園のツリーはクリスマススイヴにのみ行なわれるイベントがあった。

イルミネーションや飾りはだいぶ前から飾られているが、今日は特別。

オーナメントに綺麗な小さな宝石箱が飾り付けられる。

イルミネーションが点灯すると、その箱に飾られた宝石がキラキラ輝いてよりいっそう綺麗なのだ。

その点灯の時刻がもう少し…。

「もうちよつとでいいから、いよーよ」

「しかたないな。愛良がそう言うなら」

そう言つて、匠はちょうどあいたベンチに腰掛ける。

「しかしよく考えるよな、こんなイベント」

「素敵じゃない！憧れちゃうけどな」

実はその宝石箱、中にプレゼントが入られるのだ。

抽選で選ばれるとその宝石箱の中にプレゼントが入られて、そ

の箱に飾られた宝石と同じ宝石がついたキーがもらえる。
柄の部分がツリーになっていて、その先端に宝石がついているの
だ。

恋人へのプレゼントをそこにに入れて、鍵を恋人にわたし、オーナ
メントの中から同じ宝石がついた鍵のかかった小箱を見つける。
それが、このイベントだった。

だから、当日は傍に入れるのはその鍵をもった人のみ。
わたし達みたいなのは、遠くから眺めるだけ。

「寒いのに、みんなよくやるよ」
呆れたように呟きながら、周囲にいる恋人達を眺める匠。
ほんつとにミステリー以外興味が無いんだから…。

「あ…！」
時間になったのか、光が燈っていなかったツリーが輝きだす。
「確かに…いつもより綺麗かもな」
感心したように呟く匠。

宝石箱がキラキラと輝いて、幻想的な美しさだ。
鍵を持った恋人達が次々とツリーの傍に行き、楽しそうに宝石箱
を探している。

羨ましいけど…でも、今年は一緒に見にこれただけいいかな？
しばらく、二人でクリスマスツリーを眺める。

「さ、寒くなってきたし帰ろうか？家にご馳走用意してきたんだ」
私がそう言っただけで立ち上がるうとすると、匠は口元にちよつと笑み
を浮かべた。

「じゃ、その前に手、出して」
「？」

首をかしげながら手を出すと、匠はずっとポケットに入れていた

手を出す。

そして、私の手の上でそれを開くと何かが私の手に落ちてきた。

「…あ!?!」

そこにあつたのは、ツリーをかたどった鍵。

「匠っ!?!これ!?!ええ!?!?!」

「もうちよつと可愛く喜べよ」

慌てふためく私を見て、くくくつとおかしそうに笑う匠。

「だって、えええ!?!?!」

「お前の考えそつな事なんて、お見通しなんだよ」

そう言つて不敵に微笑む匠の瞳は、なんだかとても優しく見えた。

高鳴る胸で探し出した宝石箱の中には、小さな宝石のついた可愛い指輪。

驚きと嬉しさで目が潤む私を、匠はくすくす笑いながら見つめている。

そつけない態度をとりながら、いつも私に嬉しい驚きをくれる匠。私も、いつか匠の上手をいく演出、考えなくっちゃ!

第四話・バレンタインへ問題編

街中がバレンタインにそまる2月。

女の子からチョココレートをあげるイベントだが、チョココレート好きとしてはもらう側のイベントの方がよかったと思う、

私、橘^{たちばな}愛良^{あいり}。

幼馴染の横溝^{よこみぞ}匠^{たくみ}と出かけるたびに、『何物欲しそうな顔してるの？』と意地悪く言われる始末だ。

普段売っていないようなメーカーの美味しそうなチョコがあるのをみて、食べたくないわけがない…。

しかも、あげたい相手の匠は売っているチョコに興味はない。

食べないものを貰ってもしょうがないと言って、買ってきたチョコだと受け取らないのだ。

そんなわけで、毎年苦手にもかかわらず手作りのチョココレートを作る。

買ってくれば、美味しいチョコと一緒に食べれるのになと思いつつ……。

そんなこんなで、バレンタイン当日の放課後。

私は手紙を一通持って、匠のいる教室へ向かっていた。

チョココレートはある場所に隠してある。

毎年の儀式のようにただ渡すのじゃ、面白くない。

暗号…とういより、今回はクイズに気持ちを込めつつ、正解の場所にチョココレートを置いてきたのだ。

+++++

チョココレートのある場所を探してね！

？ 図書室のミステリー小説の棚の上
？ 匠の下駄箱の上
？ 音楽室のピアノの中

私の気持ちが一番こもっている場所にあるよ！

+++++

きつと匠なら、隠し場所も、暗号にこめた想いも気づいてくれるはず…。

そう思って、匠のクラスを覗く。

「え……」

信じられない光景に、思わず固まった。

匠の周りに大勢の女子。

「はい。横溝くん、チョコレート」

「あ、あたしも持ってきたよ」

代わる代わるに綺麗に包装された、どう見てもお店で買ったチョコレートを渡す女子達。

そして……

「どうも」

それを僅かな笑みを浮かべて受け取る匠。

だ…誰からも受け取らないって言ってたのに……。

呆然と立ち尽くす。

なんだかショックだった。

居た堪れなくなってしまう走ってその場を去る。

校門まで走っていったところで、手にしていた手紙がない事に気づいた。

でも、今更とりに戻るのもなんだか恥かしい。
しばらく、悩む。

とりあえず、チョコレートだけでも回収しようと思いつき、隠し場所に向かったがそこには既にチョコレートはなかった。

直接渡すつもりだったから、宛名のない手紙…。

匠がチョコレートを持っていたはずはない。

きっと、何かがおいてあると気づいた人が……。

果てしなく落ち込みながら、私は一人とぼとぼと学校を後にした。

第四話・バレンタインへ解答編

「おかえり、愛良」

いつもの癖で父の経営する探偵事務所によると、いつものように匠が居座っていた。

応接室のテーブルの上には、これ見よがしに山積みのチョコレート…。

「…いっぱいもらってよかったね」

「そりゃどうも」

僅かに微笑む匠はからかうような眼差しだ。

やきもちを焼いているのを楽しまれている気がする。

「市販のチョコは食べないから貰わないんじゃないの」

「俺宛のチョコレートは、手作りでも貰わないけど」

「は？」

意味のわからない匠の発言に眉をしかめる私を、匠は楽しそうに見つめる。

確かに、今まではそうだった。

私以外のチョコを貰ってきたのを見たことがない。

でも、今日の前にあるチョコは何！？

「横溝くんにつて渡してたの見たんだけどっ」

「知ってる」

「えっ？」

ぽかんとする私を見て、匠はこらえ切れないようにくっくくつと笑い出した。

「な、何よー！ー！」

「いやいや。愛良のリアクションってことごとく面白いな、と」

訳がわからなくて涙目になった私の頭を、立ち上がった匠はぽんぽんとなでた。

「愛良が、あまりにもチョコが食べたそうだったからさ」

「だから、何？」

「さすがに男の俺が買うのもなんだから、女子からの報酬を『愛良にあげるから、女の子が食べたいチョコ』にしてもらったんだけど？」

「は？」

眉をしかめる私に、にやりと笑う匠。

「俺が得意な推理は何もミステリーだけじゃなくてね…。どの教師がどんなテスト範囲でどんな傾向の問題をだすか推理するのも得意なんだよ」

「まさか…」

「そう、見事に当てた報酬」

なんだか悪い笑みを浮かべた匠を見て、先生たちをちよつと哀れむ。

「俺宛に貰ったチョコは食べたくないだろうけど、愛良のために買ってきてくれたチョコなら食べるだろう？」

思わず山積みになったチョコレートに目をやる。

食べたかった銘柄の包みもたくさんある…。

「食べます」

「素直でよろしい」

微笑んでソファに座った匠の隣に腰を下ろす。

美味しそうなチョコレートの山。

でも、渡せなかったチョコを想うとなんだか素直に喜べない。

「先に言ってくればよかったのに…」

「やきもち焼く愛良の顔を見てみたくってね」

「…いぢわる」

ぷつつとふくれる私を、匠は楽しそうに見つめている。

「それと、これが、俺の本当の報酬ってね」

「え？」

そう言っただけがどこから取り出して口に放り込んだ不恰好なチョコレートを見て、驚いて目を見開く。

それは、どう見ても私が作ったチョコレート…。

「なんで！？それ！！」

「チョコレートの隠し場所をクイズにする女なんて、愛良しかないないだろ？」

くすりと笑う匠。

そして、ポケットから手紙を取り出す。

「『一番気持ちがかもった場所』がヒント。今日はバレンタイン。こめられる気持ちは一つ…『愛』」

そう言っでちらりと私を見る匠。

思わずかあっと赤くなる。

「そして、3つの場所から愛が一番あるものを探すとなると…

『愛』＝ローマ字の『I』とすると、クイズは成り立つ。

それぞれの場所をローマ字に直し、一番『I』が入っている所…。3つ入っている1番の『図書室のミステリー小説の棚の上』だろ」

「…正解」

私がチョコを回収行く前にとりに行ったのだから、きつと一瞬で解けたのだろつ。

ちよつとした悔しさも、匠が食べてくれているのをみて暖かなものに変わっていく。

わざとやきもち焼かされたのはむかつくが、結局は私のためを想ってやってくれた事。

ひねくれてはいるものの、匠はいつだって私の事を大切にしてくれている。

「ところで、愛良」

「何？」

机の上のチョコレートの一つ取り、包みを開いていた私に匠がおもむろに声をかけた。

手には、最後の一つのチョコレート。

「味見はした？」

「…してないけど」

ちらりと嫌な予感がする。

「ま、塩味のチョコってのも風変わりでもいいけどね」

そう言って最後の一つを口に放り込む匠。

「え！？ちよっ…ほんとにつ！！！？」

匠は慌てる私を楽しそうに見つめている。

からかわれているのか、本当なのかわからない。

チョコがなくなってしまったため、真相は闇の中…。

固まる私に、優しく微笑む匠。

「大切なのは気持ちだから味は関係ない。サンキユ、愛良」

「…うん」

その言葉に嘘はなさそうで、ちよつと照れる。

いっつも私の行動をよんで、からかったり喜ばせてくれる匠。

いつか、私が匠の上手をいって驚く匠の顔をみてやるんだから！

第五話・告白〈問題編〉

「橘さんって、一年の横溝と付き合ってるの？」

放課後の教室で突然投げかけられた質問に、私、橘たちばな 愛良あいりはぽかんと相手を見つめた。

日直の仕事で残っていたので、今教室にいるのは同じ日直の小林くんと私の二人。

どこか緊張した面持ちで真剣な眼差しでそう訊ねられ、その意図に戸惑った事もある。

だがそれよりも、その答えに即答できない事に気づいたのが衝撃だった。

「仲いいから、そうなのかと思ったんだけど…」

私のリアクションに答えを計りかねたのか、おずおずと言葉を続ける小林くん。

「あ、えーっと…」

とりあえず声を出しながら、私は考える。

私と幼馴染の横溝よこみぞ 匠たくみ…。

確かに学校以外はたいいてい一緒にいるし、クリスマスや誕生日などのイベントも一緒に過ごす。

ひねくれてるから素直じゃないけど、優しいし大切にしてくれる。私は匠が好きだし、匠だって私の事を好きなんだと思う。

だけど……好きって色々ある。

付き合おうなんていう話になった事はないし、キスするとか、恋人同士がするような事はもちろんない。

せいぜい、混んでいる場所に出かけた時にはぐれないように手を繋ぐくらい。

それって付き合ってるといえるのか…？

匠の『好き』だって、もしかしたらただの幼馴染としてかもしれない……。

「付き合ってるわけじゃないよ」

「そうなんだ」

自分の考えに半ば落ち込みながらそう答えると、ほっとしたように微笑む小林くん。

意を決したように私を見つめると、再び口を開く。

「だったら、俺と付き合ってください。ずっと好きだったんだ」

私はただ驚いて、目の前にいるスポーツマンで優しい黒髪の彼をただ見つめたのだった。

「へえ、それはよかったね、愛良」

いつもいる探偵事務所の応接室。

衝撃の報告をしたにもかかわらず、匠は推理小説に目を走らせたまま余裕の笑みでそう言った。

驚きも焦りもしないところが、悔しくて寂しい。

「よかったねって…私が小林くんと付き合ってもいいの？」

「それは愛良の自由だろ」

「……………」

感心なさそうに小説を読みながら答えた匠を見て、私は何だかいたたまれなくなり、何故か溢れてきた涙を堪えながら応接室を飛び出した。

そんな私を見て匠がパタンと小説を閉じたのを視界の端に写しながら…。

昨日が金曜日でよかったと、しみじみとそう思っていた。

土日が休みだから小林くに顔を合わせるまで時間があるし、匠にだって事務所に行かなければきっと会わなくてすむ。

心を落ち着けるにはちょうどいい期間。

それなのに、私の足は何故か探偵事務所に向かっていた。

ドアを開けこっそりと中を覗くと、事務員のマミさんと目が合う。くすりとやわらかに目を細めて微笑むマミさん。

「匠さんとケンカでもしたの？ 応接室にまた何か置いていったわよ」「ほんと？」

思わず小走りに応接室へと向かう。

昨日は突き放されたようで悲しかったのに、今はもう匠が何を留意していったのかにドキドキしている。

僅かな期待。

そつと扉を開けて中を覗くとそこに匠の姿はなく、テーブルの上にはノートパソコンに図書館から借りてきたらしい数札の本、そして花瓶に活けられた花に鉢植えが置かれていた。

いつもはないそれらに、きつと何か意味があるのだろう。

私は中に入ると、ソファに座って開かれたパソコンの画面を覗いた。

そこには意味不明な文字の羅列。

F U B S F @

暗号である事は間違いないだろう。

だが、今回はヒントも何も書いていない。

これだけじゃ、さっぱりわからない。

うーんと眉をひそめてうなつていると、きいっと僅かに音をたてて扉が開いた。

「おや、まだ考え中？」

現れたのは、昨日の事などなかったかのように、いつもの不敵な笑みを浮かべた匠。

「今来たの!!」

ぷうつと頬を膨らませて答えた私を、楽しそうに見つめる。

「じゃ、しばらく時間がかかるかな？」

「すぐわかるわよっ！これくらいっ!!」

「そう？じゃ、お茶でもいれてこようかな。その間くらいにはわかるよね、愛良？」

「当然!!」

挑戦的な匠に、ついついむきになってそう答える。

すっかりいつものパターンだ。

「じゃ、紅茶でいいかな？」

「ミルクティーでよろしく!!って、匠、ヒントはないの!？」

本当に行ってしまういそうな匠に、思わず尋ねてしまう。

文字だけでは本当に意味がわからない。

匠はふつと微笑むと、口を開いた。

「なんでわざわざパソコンだと思う？」

それだけ言うと、匠は踵を返して部屋を出ると、静かに扉を閉めたのだった。

第五話・告白〈解答編〉

匠のヒントから、私はじいっとパソコンを見つめた。

文字だけを見るなら、いつものように紙に書けばいい。

ということは、ディスプレイを見るのではなく、キーボードを見るべきだろう。

私は視線をキーボードに向け、ふと気づいた。

いつもはローマ字変換なのであまり気にしていなかったが、ひとつのキーにはアルファベットとひらがなが書かれている…。

「そっか！」

同じキーに書かれているひらがなに変えるに違いないと、私はディスプレイに書かれたアルファベットをひらがなに変換していった。

「えーっと、『F』が『は』でしょ。で、『U』が『な』。『B』が『こ』で…」

そして出来上がった言葉は『はなことば』。

「花言葉？」

そう言えば、ものすごく不自然に花瓶に生けられた花と鉢植えがある。

よく見れば、重ねられたミステリー小説の中に植物図鑑と花言葉の本…。

私は少しドキドキしながら花言葉の本を手を取った。

花瓶に生けられた花と、鉢植えの植物の花言葉を調べるという事に間違いはないはず。

そこに、匠の気持が込められているはずだ。

まずは、植物図鑑を見なくても分かる花瓶の花から探す。

「えっと…まずは白い薔薇はっ…」

パラパラと本をめくると、それはすぐに見つかった。

白薔薇「私はあなたにふさわしい

微妙に自信ありげな言葉が、匠らしいといえば匠らしい。

だけど、これだけだと匠の気持はいまいちわからなかった。

私は続けて次ぎの花言葉を探す。

「えっと、赤いチューリップは…『愛の宣告』。紫のチューリップは…『永遠の愛』!？」

今度はストレートな言葉にドキツとする。

ちよつと顔を赤くしながら、私は今度は植物図鑑を手にした。

鉢植えの植物は、それを見ただけでは名前がわからなかったのだ。植物図鑑を用意してるあたり、匠にはそれも予想済みなのだろう。

「えーっと…」

しばらくばらばらと図鑑をめくると、鉢植えと同じ写真が目に入
った。

名前は「イカリソウ」。

今度は花言葉の本を手にし、イカリソウを探す。

「イカリソウは…『あなたを渡さない』…」

匠の気持のこもった強気な言葉に、ぽわっと顔が赤くなる。

「何よ…気にしてるんじゃない」

思わずそう独り言ちる。

感心なさそうな顔をして、これじゃまるで宣戦布告だ。

「おや、その顔は全部わかったのかな？意外と早かったね」

顔を赤くしている私を見つめながら、紅茶とケーキを乗せたトレ

―を手にした匠がクスクスと笑いながら部屋に入ってきた。

「簡単だったもん」

「そう？」

匠はしれつとした顔をしながら、私の前にミルクティーとケーキを置く。

そして私の隣に座り自分の前には紅茶だけを置くと、そのまま小説を手にとって読み始めた。

まるで何事もなかったかのように。

花言葉にこめられたメッセージは嬉しかったものの、匠のそんな態度をちよつと不服に思いつつ、私は目の前のケーキを口に運ぶ。

でも、それが実は今一番私がはまっているケーキ屋さんの一番好きなチョコレートケーキなあたり、匠の抜け目のなさはさすがだ。きつと、誰よりも私を見ていてくれる。

大事にしてくれるし、実は優しいのを知ってる。

でも、たまには暗号なんかじゃなくて言葉や態度で示して欲しい。そうしたら、もうちよつと不安じゃなくなるのに……。

そう思いながらパクパクとケーキを食べていると、隣から笑いをかみ殺したような声。

「なによー」

ふてくされる私に、匠はくくくつと笑いながら小説をパタンと閉じた。

「愛良って思考がだだ漏れ」

「そんな事ないもん」

ぷつつと頬を膨らませた私に、柔らかく目を細める匠。

「そう？それに、ケーキのクリームついてるし」

「え、やだっ」

慌てて拭おうとした私の手を、匠の手が素早く掴む。

え？っと思つて顔を横に向けた私の目に入ったのは、近づく匠の顔。

反射的に目をつぶった私の唇の側に、柔らかくて温かなものがそっと触れた。

「甘っ。よくこんなの一個全部食べられるよな、愛良は」

一気に茹蛸のように赤くなった私の耳に入ったのは、そんな平然とした匠の声。

ゆっくりと目を開けると、優しく微笑んだ匠と目が合った。

「だっ…な…え…」

匠の唇が触れた辺りに手を当てながら、言葉が全く出てこない私を、匠は楽しげに見つめている。

「たまには態度で示せて、心の中で言っていなかった？」

「…言っていました」

真っ赤になつてそう答える私を満足げに見つめると、匠は再び小説を読み始めた。

一つ年下の癖に、どこまでも上手である。

しかも口じゃなかったとはいえ、初めてのキスに動揺の陰すら見えない。

時には突き放して不安にさせるくせに、どん底に落とす前にしっかりと幸せな気分にさせてくれる。

「ホントは…告白された時点で断ってたんだ」

ぽつりと言った私の言葉に、匠は小説から視線をそらさなかったものの、ほっとしたように口元に自然と笑みが浮かんだ。

余裕そうに見えるけど、本当はちよっとは心配してくれたのかも知らない。

だって、ただ暗号を考えるだけならともかく、わざわざ花を買いに行ったり図書館で花言葉の本を借りてくるなんて、男子高校生にはちよっと恥かしいに違いない。

それでも自分らしい方法で、気持ちを伝えてくれたんだ。

少々照れながら花言葉の本を借りている匠の姿を想像して、私は思わず笑みがこぼれた。

「何？愛良」

「なんでもない」

突然楽しそうな笑みを浮かべた私を怪訝そうに見つめる匠。

私の前ではいつも余裕のポーカーフェイスだけど、私の知らない所では私のために色々としてくれている匠。

私ももっと匠を幸せにできるよう頑張って、いつか匠の口から「好き」って言わせてみせるんだから！

第六話・初詣へ問題編

今日は大晦日。

私、橘 愛良は自宅のコタツに入りながら、携帯電話片手にちよつとむくれていた。

メールの相手は幼馴染の横溝 匠。

年が明けたら直ぐに初詣に行こうと数日前から誘っているものの、直前となった今も『寒いから嫌だ』という意見を変えてくれる気配はない。

年明けまで数時間となり、私は匠を外出させる為に頭をフル回転させていた。

匠を動かすには、やっぱり好物を使うしかないだろう。

匠が感心するくらいの暗号を作れば、きっとそのご褒美に付き合ってくれるはず。

なんだかんだ言ったって、匠は優しいから。

私は一生懸命考えた暗号を、メールに打ち込むと送信ボタンを押した。

件名：初詣

本文：

←るあざたゆいで ↑ぎふきもちせ ↓やぬ
→いうり 〃 あいら

匠が相手だからヒントは私の名前のみだが、匠ならきつと大丈夫。文頭の矢印がポイントだと直ぐに気付くだろう。

携帯をパタンと閉じると、私は知らずのうちに笑みを浮かべていた。

メールを見た匠が、仕方がないなって顔をしながら待ち合わせ場所に来てくれる姿が目に見えたのだ。

「さて、支度しよーっと！」

そう独り言を呟いて、コタツの中から出る。

新しい年になって初めて会ったから、いつもと違う姿を見せたかった。

匠が来てくれると信じ、私は身支度の手伝いをしてもらうため、母を捜しに軽い足取りで部屋をでたのだった。

第六話・初詣へ解答編

家から待ち合わせ場所までは、歩いて10分ほど。

しかし、慣れない着物姿なので少し早めに家を出ることにした。

「行ってきます！」

そう言つて玄関の扉を閉め、せっかく着た着物が乱れないように静々歩き出す。

着物は落ち着きのある紫色に梅と菊の花が彩られた少しレトロな雰囲気、白い帯には可愛らしい花がちりばめられている。

ふわふわの白いショールが暖かい上に可愛くてお気に入りだ。

そして、普段下ろしている髪は着物に合うようにアップにし、花のついた簪で止めていた。

いつも一緒にいる匠だつて、あまり見たことのない私。

どんな顔をするのだろうとちょっと楽しみで、思わず微笑を浮かべながら門を開けて外に出ようとした時だった。

走ってくる足音がだんだんと近づいてきたのが聞こえ、転ばぬように足元を見て歩いていた私は顔を上げた。

と、街灯で照らされて見えたのは、良く見知った人物。

「匠!?」

「…間に合つた」

驚いて声をあげた私に、匠は肩を揺らすほど息を切らせ、苦しうに声を漏らす。

匠の家はうちからそう遠くはない。

家からずっとダッシュしてこなければこんなに疲れた顔は見せないだろう。

しかし、私は匠が走ってきたことよりも、匠がうちに来たことのほうが驚いた。

「匠、暗号とけなかったの!?!」

暗号の待ち合わせ場所も、時間も、今ここではない。

ちよつと勝ち誇つて笑顔を浮かべたものの、匠の呆れたような半眼でそれは直ぐに消え去つた。

「あのな…俺が愛良の考えた暗号を解けないと、本気で思う?」
ふてぶてしいほどの、自信たつぷりな態度と言葉。
私はぷうつと頬を膨らませた。

「だって、待ち合わせ場所はここじゃ…」

「『上を向いた矢印』と『いうり』が『あいら』から察すると、矢印は言葉をずらす方向。そして、ずらす文字数は一字」

「うつ…」

言い返そうとした私に、匠の完璧な回答。
声を詰まらせた私に、ようやく息の整つた匠は不敵な笑みで解説を始める。

「つまり、五十音で並べられた文字を、矢印で示された方向に一字ずらせばいい。

『い』の上は『あ』、『り』の上は『ら』ってね。

で、問題の本文は、最初は下向きの矢印だから一字ずつ下げて『れいじちようど』、

次は左にずらし『じむしよにて』、

最後は右に『まつ』。

だから、暗号の答えは『零時ちようど事務所にて待つ』だろ?」

「仰せのとおりです…」

いつもの如く、パーフェクトな答え。

私が必死に頭をひねって考えたにもかかわらず、きつとあつさりと見破つたに違いない。

さすが匠。

でも、だったらどうして家に來たのだろう?

「いくら大晦日でも、こんな深夜に薄暗い道、一人で歩いたら危ないと思わないのか？」

「あ…」

私の考えを見通したかのように、匠は少々ご機嫌斜めな表情でそう言った。

暗号を解読した上で、私が一人でお父さんの事務所まで歩いていくのが危ないからと、家まで迎えに来てくれたのだろう。

「人がせつかくのんびりと風呂に入って本読んでたのに…出てきたらそんなメールが来てるし、携帯に電話してもでないし…」

「えーと、着替えに夢中で気付かなかったかも？」

えへへと、誤魔化すように笑いながら改めて匠を見つめると、急いで支度してきたのだろう、まだ髪は乾かしたばかりのようではのかに良い香りが漂いながらも、まだちょっと湿っている。

頬が少し火照っているのは、走ってきたからなのか、湯上りだからなのか…。

いつもきっちりしている服も、いかにも慌てて着たかのようにちよつと乱れている。

私の心配をして、急いで迎えに来てくれたのだろう。

いつも冷静沈着で余裕綽々な匠が、私の為にこんなに慌てて来てくれた…。

それが、なんだかすごく嬉しくて自然と笑みが浮かんでしまう。

ニコニコと笑う私を見て、匠は小さく息をついた。

「愛良…俺は注意してるんだけど？」

「ありがと、匠」

満面の笑みの私に、しばし呆れたような眼差しを向けた後、仕方がないというように口元に小さく笑みを浮かべた。

「風邪ひく前に帰りたいところだが…、せつかく愛良が綺麗な格好してくれてるし、初詣、お供いたしますか」

「ありがと。でも、風邪ひいたら大変だから、これ…」

湯冷めしそうな匠に肩にかけたストールを渡そうとストールに手

をかけたが、匠はその手をとってそれを止める。

「いいよ。可愛くて似合ってるのにもつたいない」

「え…」

ぼわつと赤くなる私を見て、匠はたまりかねた様にくくくつと笑う。

「相変わらず反応いいな、愛良は」

「あー！もう！！年末の最後の最後にからかうのなしっ！！」

ぷうつとふくれた私を、匠は楽しそうに見つめる。

「慌てさせられたから、少しは楽しませてもらわないと」

「もうっ」

ふて腐れて半眼で匠を見つめると、匠は口元に笑みを浮かべる。

「でも、今言ったのは嘘じゃないけど？」

「え？」

再びちよつと赤くなる私を、優しげに見つめる匠。

そして、ぽけつと匠を見つめている私の手をそつととった。

「手ぐらいいは、温めてもらおうかな？」

「うん！」

冷たい手が私の手を優しく握り、そのまま歩き出す。

着物の私に合わせて、ゆっくりな歩調。

そんな匠のさりげない優しさが心地よくて、自然と笑みが浮かぶ。

沢山の人ごみの中での初詣。

私は手を合わせ、そつと祈る。

どうか今年も来年も、それから先もずっと、匠と一緒にいられますように…。

第七話・ラブレター〈問題編〉

いつものように、父の経営する探偵事務所の応接室で、私、橘愛良と、幼馴染の横溝匠は、向かい合って座っていた。

いつもと違うのは、私たちの視線が二人の間にあるテーブルの上に注がれていること。

そこには、一枚の手紙があった。

「で、これをその助けた男に貰ったわけだ」

「助けたって言うか、『おまわりさん！』って叫んだだけなんだけどね」

事の起りは、昨日の下校時。

一人の綺麗な男の子が数人の男たちに絡まれているのを、たまたま目撃した事からはじまった。

おまわりさんと呼ぶ振りをしたところ、男たちは慌てて逃げ去り、その男の子にお礼を言われたのだが…。

「で。これ、ねえ…」

「今日、校門でたらその人がいて、渡されたんだ」

互いに名も名乗らず、その場を去った昨日。

だけど今日、彼は校門を出たところで待っていた。

そして、実に魅惑的な微笑と共に、この手紙を渡されたのだ。

+++++

貴方に出会えたのも、何かの縁

素敵な出会いを大切にしたい。心

にあるこの想いをぜひ聞いてほしく

詩のように美しい言葉はかけないから、自

己満足じゃなくて、貴方に

うまく伝えたいから、ま

えに君にあつた場所で、いつまでも君を待つ

+++++

「これ…どういう意味だと思う？」

人から貰った手紙を人に見せるのはよくないと思うのだが、この何だか違和感のある手紙をどうとっていいのかわからず、私は匠に見せたのだった。

だが、匠は手紙に一通り視線を走らせた後、呆れたように小さくため息をつく、鞆から小説を取り出し、ソファにもたれかかってそれを読み始める。

「ちよつとー！匠の意見を聞いてるんだけど！」

「愛良が貰った手紙なんだから、自分で考えたら？」

本から視線を上げもせず、興味なさそうに答える匠。

私は、ぷうつと頬を膨らませた。

ともすれば、ラブレターにも思えるこの手紙。

もう少し、何かリアクションしてくれてもいいと思う。

「考えてるけど、わからないから匠にきいたんでしょ！前に君にあった場所とか、ずっと待つか書かれても、会ったのは下校途中の細道か、校門の前だけだし、いつどこに行っているのかわからないし」

「へえ、行ってあげるんだ」

ふて腐れたように行った私に、匠はちらりと視線を向けながら、からかうような口調でそう言った。

ラブレターかもしれない物を渡した相手に会いに行くというのに、

動揺のかけらもないのが小憎らしい。

「だって、本当にずっと待ってたらかわいそうだもん。それに、すごく素敵な男の子だったし！」

匠に焼きもちを焼いてほしくてそう言ったものの、匠は気にした風もなく、口元に笑みすら浮かべ、再び小説に目を通している。

余裕綽々のその態度に、私はむっと唇を尖らせた。

「もー……。いいよ、今から彼にあつた二つの場所に行ってみる。もしかしたら、もう待ってるかもしれないし」

「愛良、そいつに会った時、暗号系のミステリー小説でも持ってた？」

「え？」

ふて腐れて立ち上がった私に向けた匠の言葉に、私は驚いて動きを止めた。

確かに、匠に借りた暗号が使われている小説を持っていて、それを助けた彼の前で落としたのだ。

「なんでわかったの、匠？」

いくらミステリー好きでも、見ていない限りそんなことわかるわけがない。

でも、実際にはその場に匠がいなかったのは間違いない。

私は再び腰を下ろすと、匠をじっと見つめた。

すると、匠は小説から視線をはずさないものの、ふっと口元に笑みを浮かべ、それから口を開いた。

「その手紙には、ちゃんと待ち合わせ場所も時間も書いてある」

「え？」

「相手もミステリー好きだったんだろ？ 愛良も好きだと思って、そんな手紙にしたんだろ」

「え？ え？？」

匠の言葉に驚いて、私は再び手紙を読み直した。

だけど、場所も時間もわからない。

というか、匠の言い草からすると、この手紙は実は暗号なのだろう

う。

まさか、匠以外に暗号を渡してくる人間がいるなんて、思いもしなかった。

「匠……ヒントは？」

「愛良が貰ったんだから、自分で考えたら？」

手紙とにらめっこする私に、そっけなく答える匠。

しかたなく、私は一人で文面と向き合い始めた。

だが、さっぱり見えてこない。

「えーと、えーと……とりあえず、何かに変換するのかなあ。それとも、要らない言葉を抜くとか……」

独り言のように呟きながら、ちらつと匠を見る。

と、それに気づいたのか、匠も独り言のように小さく呟いた。

「そのままでもわかるけど、書き直したほうがわかりやすいな」

まるで小説に対する独白のようだが、間違いなく私に対するヒントに違いない。

人の作った暗号でも、一瞥しただけで解読してしまった匠。

なんだかんだいって協力してくれる匠に微笑を向けてから、私は暗号解読に取り掛かったのだった。

第七話・ラブレター〈解答編〉

「えーと、書き直すとなると…ローマ字にするにしても、とりあえずひらがなで書こうかな」

そう呟いて、私は紙に手紙の文面をひらがなで書きなおす。

『あなたにであえたのも、なにかのえん。すてきなであいをたいせつにしたい。こころにあるこのおもいをぜひきいてほしくしのうにうつくしいことはかけないから、じこまんぞくしゃなくて、あなたにうまくつたえたいから、まえにきみにあつたばしよで、いつまでもきみをまつ』

「……これ、ローマ字にしたら結構長いなあ…」

「改行されてるのも、何かの狙いなのかもな」

眉を顰めた私に、再び独り言のようなヒントをくれる匠。

言われてみれば、手紙は不自然なところで改行されている。

私は匠のヒントを元に、手紙の改行通りにひらがなで書き直す。

あなたにであえたのも、なにかのえん

すてきなであいをたいせつにしたい。こころ

にあるこのおもいをぜひきいてほしく

しのうにうつくしいことはかけないから、じ

こまんぞくしゃなくて、あなたに

うまくつたえたいから、ま

えにきみにあつたばしよで、いつまでもきみをまつ

書き直したものをしばし見つめた私は、はっと息を呑んだ。

「……あー！わかった！！」

「さて、答えは？」

私が叫ぶと、匠はパタンと小説を閉じ、それから私を見つめてそう尋ねた。

「改行どおりに文頭と文末を縦に読む！！だから、えーっと、

『あすにしようえんろくじにまつ』。

明日、西公園で六時に待つってことでしょ！！」

「大正解。って、俺が言うのも何か変だけど」

匠はそう言うと、ひょいっと手紙を取り上げた。

そして、少し呆れたような眼差しでそれを見つめる。

「それにしても、初対面の人間にこんなもん渡してどうしたかったんだろぅな」

「そうだよね。暗号だってわからないかもしれないし」

小首を傾げる私の前で、少し考えるような表情の匠。

少しすると、匠は手紙から私に視線を移した。

「ところで、その男ってどんな奴？」

「え？うーんと……」

匠の問いに答えるべく、私は手紙をくれた彼のことを思い出す。

匠と同じくらいの身長、細身で顔も小さくて、すらりとスタイルのよい黒髪の男の子。たぶん、年は同じくらい。からまれていたとは思えない、穏やかで優美な微笑みに、落とした本を拾ってくれたしなやかで品のある動きは、そう、まるで……。

「なんていうか、王子様？」

「愛良……。考えた末にその表現はどうかと思うけど？」

呆れたように呟いた匠だったが、一瞬後にはたまりかねたようにくくくつと笑い出した。

「ほんと、愛良っておもしれえ」

「なによー！だって本当にそんな感じがしたんだもん！！」

「はいはい」

軽くあしらうように返事をした匠は、手紙を置くと再び読書に戻る。

「ま、行くならお気をつけて」

「…いつてもいいの？」

「愛良のご自由に」

匠の本心を見破ろうとじっと見つめたものの、ポーカーフェイスからは何も読み取れない。

焼きもちを焼かせてみたくて、素直じゃない事を言おうとも思っただが、せっかく暗号解読の手伝いをしてくれたのに、それもどうかと思う。

「暗号が解けなかったと思われるのも悔しいし、本当に待たせたら悪いから、一応明日行ってみる」

「どうぞ」

平然と答える匠をちょぴり不満に思いつつ、私は明日彼に会いに行くことにしたのだった。

そして、翌日…。

「来てくれたんだ、ありがとう」

西公園に行くと、既に待っていた王子様のような男の子は少しハスキーな声でそう言った。

人もまばらになった公園のベンチに座っていた彼は、読んでいた本を閉じるとゆったりと立ち上がる。

そして柔らかな微笑を浮かべ、嬉しそうに私を見つめた。

「最初、暗号だってわからなかったんだけどね」

「でも、来てくれたって事は、見事にとけたんだよね。すごいな。」

「勇氣もあるし、頭の回転も速いんだね」

私の瞳をじっと見つめ、実に魅惑的な笑みを浮かべる彼。思わずドキッとしてしまう。

「いや、そんな事ないんだけど」

手紙を他の人に見せたともいえず、私は笑ってごまかす。

と、急に彼の綺麗な顔がずっと近づき、私は反射的に一歩下がった。

だが、下がった先にはベンチがあり、足を取られてすっと座ってしまふ。

「謙虚なところも、可愛いね」

「ええっ!？」

くすつと微笑んだ彼は、私を捕まえるかのように、ベンチの背に両手を置いた。

両脇を腕でさえぎられ、何が起こったかよくわからない私は逃げるすべも思い浮かばず、顔が赤くなったままうろたえて彼を見つめるしかできなかった。

「わざわざ来てくれたって事は、期待してもいいのかな？」

「な、な、何をっ!？」

「君に一目ぼれしたんだ。俺と付き合ってくれない？」

そう言つと彼は目を細め、片方の手で私の顎をついつと持ち上げた。

あまりの事に、ぴしつと固まる私。

その間に、黒髪をさらりと揺らしながら、彼の綺麗な顔が近づいてくる。

「ちょ……だ……た……!!」

「そこまでにしとけよ、伊吹」

私が言葉にならない叫びをなんとか口にした時、耳慣れた声が響いた。

その言葉に反応し、迫っていた彼の顔がゆっくりと離れる。

そして、私の目に映ったのは、匠の姿。

「愛良、だから気をつけろっていったる？」

「だ…た…」

呆れ顔の匠に言葉を返そうとしたものの、動揺しすぎていて、やはり言葉にならなかった。

それを見て、匠は小さく息をつく。

「伊吹。やりすぎ」

「リアクションが面白かったから、つい」

匠に注意された彼は、くすくすと楽しげに笑う。

どうやら、二人は知り合いらしい。

伊吹と呼ばれた彼は、ゆっくりと匠に歩み寄って行った。

「お前、わかってて愛良に手紙わたしたな」

「まあね。愛良ちゃんの携帯に、前に匠が買ってたストラップがついてたから。匠も、俺からの手紙だってわかってたんだろ？」

「ミステリー好きの王子様っていったら、伊吹くらいしか思いつかないからな」

「王子様って…愛良ちゃんもなかなか面白いこと言うね」

くすくすと笑いながら、匠の肩に親しげに手を置く伊吹くん。

匠は、呆れ顔で彼を見ている。

二人の会話を聞きながら、私はようやく落ち着きを取り戻した。

「匠…。その人は…」

「赤川伊吹。中学の頃、塾で一緒だったんだ」

「どうも」

思いつきり人をからかっておいて、まったく悪びれずに笑顔を浮かべる伊吹くん。

匠もそんな彼に呆れてはいるが、ただそれだけ。

いくらお友達でも、たとえ冗談でも、キス寸前まで迫った相手を、もう少し怒ってくれてもいいと思う。

「匠。どうやら愛良ちゃんは俺よりも匠に不満そうだよ」

「みたいだな」

二人とも私の考えがわかったのか、伊吹くんは楽しそうに微笑み、

匠は小さくため息をついた。

「だって…」

「でも、愛良ちゃん。この場合、焼きもちをやくなら、匠じゃなくて、愛良ちゃんただけだな」

「は？」

拗ねて唇を尖らせた私だったが、伊吹くんの言葉の意味がわからず、間の抜けた疑問の声をあげる。

それから、必死に思考をめぐらせ、一つの答えにたどり着く。

「え？それって…え？？まさか伊吹くんって、実はど、同性にしか興味がないとか！？」

私の答えに、伊吹くんは匠の肩にもたれかかるようにして肩を震わせて笑いはじめ、匠も私のリアクションがおかしかったのか、笑いを堪えるように横を向いた。

「愛良ちゃん、ほんといいリアクションしてくれるね」

「え？え？？」

二人の反応にどうやら間違いだつたと気づいたものの、他に答えが思い浮かばず、うろたえる私。

すると、笑いを飲み込んだらしい匠が、私を見つめて口を開いた。

「愛良。人を見た目で判断するのは、よくないな」

「え？？」

「赤川伊吹、十六歳。性別は、女だ」

「……………ええええ！！！！？？？？」

匠の言葉に、私は今日一番の叫び声をあげた。

そんな私を見て、涙目になって笑う伊吹くん…もとい、伊吹さん。しかし、女と言われた後でも、綺麗な男の子にしか見えない。

「ご、ごめんね。ひどい勘違いしてって…ん？あれ？」

「いいよ、別に。今愛良ちゃんが疑問に思ったとおり、わざと男の振りしてるし」

笑いすぎて出た涙を拭きながら、そう言った彼…じゃなく彼女は、柔らかに目を細めて匠の横顔を見つめた。

「一発で俺が女だつて見破つたの、匠くらいだし」

「よく見ればわかるだろ、普通」

「でも、実際にみんなわからない」

「だからって、いい加減、女口説いて遊ぶのはやめた方がいいと思うけど？そのうち、刺されるぞ」

「鍛えてるから大丈夫」

「あ、遊ぶ……？」

二人の会話に疑問の声をはさむと、匠がため息混じりに質問に答えてくれた。

「伊吹の趣味は、彼氏いる女を男のふりして口説き落とすこと。たぶん、愛良が助けた時も、彼女奪われた男が文句言いに来てたんだろ」

「さすが匠。ご名答」

被害者はむしろからんでた人たちなのかー！と、私は心中思わず叫ぶ。

が、驚きすぎて声にならなかった。

「あれくらいなら、喧嘩しても勝てただけだね。でも、助けられてありがとう。愛良ちゃん」

「いえ、どういたしまして……」

なんとか言葉を返した私をみて、伊吹さんは匠から離れ、私の方に歩いてきた。

そして、私の耳元にそつと口を寄せ、私が驚いている隙に小さな声で囁く。

「からかってごめんね。ライバルがどんな人か、知りたかったんだ」

「……え？」

思わず固まった私を見て、くすつと微笑む伊吹さん。

振り返って匠に別れを告げると、そのまま去っていった。

その後姿を小さくため息をつきながら見ていた匠は、安心して私のもとにゆっくりと歩いてきた。

「た、匠と伊吹さんって仲いいの？」

「伊吹？まあ、普通に。ミステリー談義を心行くまでできるのは、伊吹くらいだな」

「へ、へえ……」

しどろもどろに答えた私を匠はじつと見つめ、それからくくつと笑った。

「な、何よー！」

「伊吹に何を吹き込まれたかしらないけど、あいつの趣味は女を困らせて面白がることだからな。いちいち本気にするなよ」

「で、でも……」

最後のひと言は、嘘じゃないような気もした。

だって、匠を見つめる瞳は、なんだか澄んで見えたから。

「ま、今後は愛良にかまわないように後で言っとくけど」

「え？」

匠を見上げると、私を見つめ、柔らかに目を細めていた。

「愛良をからかっていいのは、俺だけだから」

「！？」

思わずかあつと赤くなると、匠はたまりかねたようにくくつと笑う。

「ほんと、いいリアクション」

「もー！いちいちからかわないでよー！！」

「愛良が見知らぬ男に会いに行つたのをわざわざ迎えに来たんだ。少しは俺も楽しませてもらわないとね」

そう言つと、ふてくされた私の手をとって歩き出す匠。

「だったら、最初から行くなって言ってくれればいいのに……」

「何か言つた？」

「別にー」

本当は最初から相手が女の子だとわかっていたから、止める気がなかったのだろう。

でも、一応心配だから迎えに来てくれた。

「本気だったとしても、渡さないもん」

「ん？」

「なんでもなーい！」

にっこりと微笑んだ私を怪訝そうに見つめた匠を見ながら、私は心の中でそつと誓う。

たとえどんな子が相手でも、匠だけは譲れないと。

第八話・不安へ問題編

父の経営する探偵事務所の応接室の扉をそつと開け、そこに目当ての人物がいないのを確認すると、

私、橘 愛良は、我知らずため息をついた。

もうこれで一週間、幼なじみの横溝 匠はここに来ていなかった。約束しているわけではないが、当たり前のように毎日来てはここでミステリー小説を読んでいる匠。

ケンカをするとはばらく現れない事もあるが、今回はケンカはしていない。

だから、来てくれないと不安になる。

だが、来ない訳を素直に聞けない理由があった。

本当は、心辺りがあるのだ。

この一週間、学校ではやたらいい男が毎日校門で誰かを待っていると噂になっていた。

それはたぶん、匠の友人の赤川伊吹くん。

一度だけ匠と一緒に帰っていくのを遠くからみかけたので、間違いないだろう。

今日は土曜日。学校がないので匠がここに来ているかと思っただ、いないという事は今日も伊吹くんと一緒なのかもしれない。

匠の大好きなミステリー作家の新作が先週末に発売された事を考えると、ミステリー談議のできる伊吹くんと毎日熱く語り合っているのかも…。

そう思うと、胸の中がもやもやした。

見かけは綺麗な男の子だけど、性別は女の子。

おまけに、匠に気があるらしい伊吹くん。

そんな人と匠が毎日一緒に過ごしているのは、やっぱり嫌だった。

確かに私ではミステリー小説の話はできないかもしれない。

でも、私だって少しは匠の好きな物を理解しようと努力してる。

「…負けないもん」

匠に私の方を向いてほしくて、私は携帯電話を手にとった。
そして、考えていた暗号をメールでうち始める。

+++++

『運河 虹 弟子 ロック 昼寝 籠手 絵馬』

『千葉 穴 平ら』 より

+++++

「これでよし！」

伊吹くんといっても、匠はきつと、匠の為に暗号を考えた私の為に
来てくれる。

そう信じて、私は事務所を後にしたのだった。

第八話・不安へ解答編

厚い雲に覆われた空の下、私はメールで伝えた待ち合わせ場所に立っていた。

そこにある時計に目をやると、ちょうど待ち合わせの時間。だけど、匠が現れる様子はまだなかった。

少し不安になって小さくため息をついた時、ぽつりと頭に何かがあたる。

地面を見ると、土の上に増えていく水玉模様が目に入った。どうやら雨が降ってきたらしい。

「もー」

一人で不平の声を漏らしながら、雨宿りをすべく大きな木の下に移動する。

そして、再びため息をついた。

いつもなら突然の呼び出しでも、なんだかんだいいながらも来てくれる匠。

それなのに、何の連絡も無しに来てくれないなんて、今まであっただろうか…。

携帯が鳴った気配はないが、もしかしたら連絡が入っているかもとバッグの中から電話を取り出そうとした時、私の上に何かが差し出される気配とともに、目の前に男の人らしき足が見えた。

「たく…!？」

「匠じゃなくて残念だったね、愛良ちゃん」

「伊吹…く…さん」

匠が来てくれたと喜んで顔を上げた私の目に映ったのは、伊吹くんの笑顔。

私に傘を差し出しながら、伊吹くんはくすつと笑う。

「いいよ、伊吹くん。このなりじゃ、その方が呼びやすいと思うし」

どう見ても男の子にしか見えない自分を指し、伊吹くんは軽く肩をすくめた。

「あ…うん。傘…あり…がと」

動揺しすぎてしどろもどろになりながら、私は伊吹くんの手渡された傘を受け取る。

自分の傘も持っているということは、偶然通りかかったとも思えない。

私がここにいると知っていて来たということは、それはきっと匠に聞いたから…。

「残念ながら、匠は来ないよ」

「え…」

「その傘さして、さっさと帰ってさ」

伊吹くんの言葉に、私は傘を握り締めてうつむいた。

今まで、匠がこんな事をしたことはない。

暗号をつかったり素直に言っただけでなくとも、他人を使って自分の言葉を伝えたりなんかした事がなかった。

それなのに…。

「なんで…」

「わからない？どうして俺を代わりによこしたのか、ちゃんと考えてみたら？」

私をまっすぐに見つめながら、伊吹くんはそう言い放った。
考えて、不安になる。

「匠は…大丈夫だね？」
「ん？」

私の問いに、怪訝な表情を浮かべる伊吹くん。
質問の意味がわからなかったらしい。

「匠、怪我とかしたわけじゃないよね？」
「へえ…」

私の真剣な問いかけに、何故か感心したように呟く伊吹くん。
そのリアクションからすると、私の心配は杞憂のようだ。
その事に、とりあえずほっと胸を撫で下ろす。

「匠の予定も聞かないで突然呼び出したりして、呆れて見捨てられたとか、考えないわけ？」

「呆れたとしても、匠は見捨てたりしないよ。匠、本当はすごく優しいもん」
「ふうん…」

きっぱりと言い切った私を見てから、伊吹くんは私に一步近づき、そして傘を下に置くと手を伸ばし、くいつと私のあごを長い指で上げ、背の高い自分の方に向けさせた。

女の子とわかっていても、綺麗な顔が突然近づいて、さすがにドキッとする。

「約束の場所に俺みたいなのを送っておいて、どうして信じられるの？愛良ちゃん、匠の事、どう思ってるわけ？」

「わ、私は…」

慌てて逃げるように一歩後退ってから、私は木々の合間から落ちてくる雨にぬれていく伊吹くんを見据えた。

伊吹くんの事はまだよく知らない。

伊吹くんが匠の事を本当はどう思っているのかもわからない。でも、この気持ちだけは負けたくない。

「私は、匠の事が、好…」

そこまで言った時だった。

辺りがカツと光り輝いた。

これは間違いようもなく、雷だ…。

「つきやああああ！！??？」

続いた轟音と共に、思いつきり叫ぶ私。

と、背後からふわりと温かなものが私を包み込んだ。

驚く私の耳元に、聞きなれたくくつという笑い声。

「相変わらず、見事な悲鳴だな」

「た、たく…ひやあああ！！??？」

振り返って匠の顔を確認するやいなや、再び鳴り響いた雷に悲鳴を上げる私。

匠は再び笑いながら、今度は正面から私を抱きしめてくれた。

「なんだ。やっぱり来たんだ、匠」

「任せたのが伊吹じゃ、少々心配だし」

笑いを含んだ声の伊吹くんにそう言った後、匠は私を抱きしめていた腕を緩めると、呆れたような眼差しで私を見つめた。

「愛良…」

「な、何？」

「出かけるときは、携帯の充電をチェックしたら？それから、雷嫌いだったら、天気予報も確認した方がいいと思うんだけど」

「え…」

私は慌ててバッグの中から携帯電話を取り出した。

お正月と違って匠が暇だと確認がなかったので、今回は電源を切っていない。

だが、取り出した電話は電源が切れていた。

「あれ？あ、あははきやー！ー！！」

笑って誤魔化そうとした時に再び雷が鳴り、再び目の前の匠に抱きつく。

と、前後から堪えきれないような笑い声が聞こえてきた。

「あははきやーって…、愛良…」

「ほんと、愛良ちゃんナイスリアクション…」

二人に笑われむっとしつつも、再び雷がなるかもしれない恐怖に怯える私。

でも、匠が優しく髪を撫でてくれたので、怖さはすうっと消えていった。

「じゃ、役目を果たしたし、俺はもう帰ろうかな」

伊吹くんのそんな声が聞こえると、匠は小さく息をついた。

「余計なことの方が多かったんじゃないか？」

「そう？嘘はついてないんだけどな。言葉は足りなかったかもしれないけど」

伊吹くんの笑いを含んだ声。

匠の腕の中でゆっくりと振り返ると、私と目があつた伊吹くんはくすつと笑った。

「バイトが終わらなくて時間に行けないから、雷がなりだす前に家に帰って待つてろ。って、伝言を伝えに来たんだ。愛良ちゃんの携帯がつかなくなかったから、雲行き見て匠が慌ててね。俺が愛良ちゃんに関するの嫌がってたくせに頼むくらいだから、愛良ちゃんの雷嫌いが相当心配だったんだろうね」

「それも余計だ、伊吹」

「匠を振り回せるの、愛良ちゃんくらいだね。匠が走って移動するなんて、俺、見た事なかったんだけどな」

「え？」

くすつと笑った伊吹くんの言葉で、私はようやく匠の様子に気づいた。

身体が熱いし、肩で息をしている。

どうやら、本当に走ってきたらしい。

「って、匠が、バイト!？」

「反応遅いから」

違うところに驚くと、冷静につっこむ匠。

伊吹くんの笑い声も背後で聞こえたが、そのまま去っていったようだった。

伊吹くんに軽く手を上げて挨拶をしている匠を驚きの眼差しで見つめていると、匠は再びくくつと笑った。

「そんなに驚くところ？」

「だって、匠が働くなんて!!」

「俺は、雷警報が出てる中、外で待ち合わせする愛良の方が驚きだけど？」

「だっ…きゃあああ!？」

匠の言葉の直後、再び雷がなり、私は反射的に匠にしがみついた。笑いながらも怖さを和らげるように優しく抱きしめてくれる匠。久しぶりに会えたのも嬉しくて、私は匠に抱きついたまま口を開いた。

「だって、メールした時は晴れてたもん。それに、出かけるまでは携帯も電源はいつてたし、匠がもっと早く暗号という連絡してくればよかったのに…」

嬉しいくせに、相変わらず素直じゃない事を言ってしまう。
すると耳元で、匠が呆れたような声で解説をはじめた。

「二つのカッコの中に、それぞれ関連のなさそうな単語の羅列。
二つ目のカッコは後ろにくより>がついているところを見ると、二つ目のカッコは差出人の事。
つまり、愛良。」

そう考えて単語を見れば、どんな暗号かはすぐにわかる。

千葉・穴・平ら。これらをひらがなになおして、並び替えると『たちばなあいら』。

ようするにこの暗号は《アナグラム》。言葉を並び替えると、正しい言葉が現れる」

「…ご名答」

さすがは匠だと思う。

名前のヒントだけであっさりと見破られてしまったようだ。

だけど、メールを送ったのは数時間前。

バイト中でも空いた時間に気づいて、その間に返信できそうな気がする。

「すぐにわかったんでしょ？ だつたらなんで…」

「あんな、愛良。どんな暗号かわかってても、何を伝えたいかもわからないのに、文字の羅列から意味のある文章を導き出すのはさすがに時間がかかるんだよ。十七個の文字の組み合わせ、何通りあると思うてるのかな？」

「そ、それは確かに…」

文章を分解して他の文章にする事が出来ず、結局単語を並べるに至った私。

確かに、逆の方が難しい気がする…。

「うんが・にじ・でし・ろつく・ひるね・こて・えま…。

並び替えると『ひがしこうえんでろくじにまつてるね』。

アナグラムにするなら、もっと簡潔な文にしないと、暗号はわかっても、解読できない可能性もあると思うけど？」

「匠なら出来ると思って」

「おだてて誤魔化しても無駄」

ちよつと怒つたような口調の匠。

私はきゅつと匠のシャツをつかんだ。

怒ってるのは、きつと私のため。

雷嫌いの私が一人で公園にいるのを、きつとすごく心配してくれたから。

友達に先に行ってもらって、それでも心配だから走ってきてくれた。

「ありがと、匠」

「反省を促してただけだな？」

「いいの。ありがとで！」

そう言い張ると、匠はくしゃつと私の長い髪を撫でた。

どうやら、許してくれたらしい。

そして、何かを思い出したように、くすつと笑う。

「ところで愛良」

「何？」

「『匠の事がすっきゃー』って何？」

「えっ……」

匠の言葉に焦って、思わず匠の腕から脱出する私。

匠は楽しげな瞳で私を見つめている。

「さっき、伊吹に向かっていっただろ。すっきゃーって」

「そ、それはっ……」

絶対に分かってて言っている匠の余裕の態度に負けるかと思いいながらも、私は気がつけばかあつと真っ赤になっていた。

「た、匠の事が、す、スキャンしてみたいなーと！」
「意味わからないし」

私のわけのわからない誤魔化しに、くくつと笑う匠。
しかし、それで気が済んだのか、私が落とした傘を拾うと空いた手を私に差し伸べた。

「さ、さつさと帰るぞ。夜に向けて、もっと酷くなるらしいから」
「う、うんひゃあああ!？」

匠の手をとった瞬間、再び雷鳴が轟き、私は匠の腕にぎゅつとしがみついた。

やっぱり、どうしても雷は怖い。

匠の腕にしがみついたまま震えていると、ふっと小さく匠の笑う声が聞こえた。

見上げると、目を細めた匠と目が合う。

「雷が怖くなるおまじないを聞いたんだけど、愛良、試してみる？」
「おまじない？」

匠の口から珍しい単語が出てきたのに驚いたが、この雷雨の中を帰るには、おまじないにもすがりたい気分だった。

怪しみながら頷くと、匠は口元に笑みを浮かべる。

「とりあえず目をつぶる。それから、深呼吸」

言われたとおりにしてみるが、それくらいじゃ気はまぎれなかった。

次はどうしたらいいのか…。

それを聞こうとした瞬間、ふっと何かが近づいたのがわかった。そして、その次の瞬間には、額に温かで少し柔らかな感触…。

「どう？効いた？」

私の額から唇を離れた匠は、平然とした顔でそう言った。
一瞬で真っ赤に染まった私とは対照的だ。

「あ、あんまり…」

「ふうん」

「…もうちょっと効くおまじないして？」

短く呟いた匠をじっと見つめながら、私は思い切ってそう言ってみた。

勘のいい匠なら、きっとわかるはず…。

「じゃあ、もう一度目をつぶって？」

「う、うん」

匠に言われ、私はドキドキしながら目をつぶった。
遠くでゴロゴロと雷が鳴っても、気にならなかった。

さっきよりも少し低い位置で、何かが近づいてくるのがわかる。
自分の心臓の音がやたらと大きく聞こえたとき、ふわりと優しく匠の唇が触れた。

目を開けると、目を細めた匠の瞳。

「さ、ほんとにもう帰るぞ」

「……………」

ちよつとむくれた私の手を取り、匠は私の手を引きながら歩き始めた。

匠の唇が触れたのは、私の頬。

絶対、わかつて違う場所にいる…。

「意地悪…」

「何か言った？」

「なんでもなーい！」

一つの傘に入って歩きながら、そう答える。

よく見てみれば、伊吹くんが持ってきたのは匠の傘だった。

そして、匠は少し濡れている。

私の為に自分の傘を伊吹くんに託し、私の為に雨の中走ってきてくれた匠。

その気持ちだけで、十分だと思うことにする。

「ねえ、バイトって何してたの？」

「伊吹の知り合いの塾の手伝い。怪我して短期入院してる人の変わりにね」

「なんで教えてくれなかったの？」

「言ったら見に来ただろ、愛良。俺が小学生に勉強教えてるなんて知ったら」

「絶対見に行った！ていうか、今からでも見たい！！」

「絶対駄目」

久しぶりの匠との会話を楽しみながら、家路に向かう私たち。

一週間不安だったけど、雷は怖いけど、でも、おかげで匠に抱きしめたもらえたからよかったことにする。

今回は心配かけちゃったけど、今度は匠を喜ばせる暗号を考えて

みせるんだから！

第九話・乙女心へ問題編

「…なんか、賑やかだったね」

「だから反対したんだよ」

父の経営する探偵事務所の応接室で溜息をついた私、橘 愛良に、幼馴染の横溝 匠は小説を読みながらさりりとそう答えた。

先ほどまでここに、匠の友人の赤川 伊吹くんが遊びに来ていたのだ。

ミステリー好きとして探偵事務所に遊びに行ってみた。

学校の前で待っていた伊吹くんのそんなお願いを匠は断ったが、私が伊吹くんの笑顔に押し切られた形になった。

別に謎や面白い事件が転がっているわけではないので楽しいものでもないと思ったのだが、伊吹くんは楽しそうに事務所の中を見学していた。

「マミさんまで口説いてるし…」

事務員のマミさんまで魅惑の微笑みで口説いていた、一見美少年の伊吹くん。

手慣れた様子に、女性を見ればいつもああなんだろうかと疑ってしまう。

そう思いながら、私はクッションを抱きしめながらソファに座り、向い側のソファで小説を読んでいる匠を見つめた。

そして、浮かんだ疑問を口にする。

「伊吹くんみたいなタイプと匠が仲がいいって、ちょっと意外だよ
ね」

ミステリー好き同士だから気が合うのはわかるが、異性：まあ、伊吹くんの場合は同姓だが、女の子に軽い態度をとる人を匠が気に入ると思えなかった。

「そう？」

「うん。女の子口説きまくるようなタイプ、苦手じゃなかった？」
「基本的にはね」

小説から目を離さず、軽く答える匠。

だが、私はその言葉にちよっぴり不安になる。

基本的に苦手だけど、伊吹くんは大丈夫。

ということは、伊吹くんは特別ということになる。

そして、伊吹くんにとっても匠は特別な存在に見える。

一応異性同士で、互いに特別な存在……。

と、くくつと匠の笑う声が聞こえた。

「愛良って、ほんと思考がだだ漏れ……」

「なっ!？」

小説で口元を押さえながら、私を見て笑っている匠。

「べ、別に何もっ……」

「伊吹は生物学上異性だけど、そういう意識でつきあってるわけじゃないんだけどな。あいつも、俺の事をそういう意味で気に入ってるわけじゃない」

慌てた私に、匠は余裕の笑みでそう解説した。
気に入られている自覚はあるらしい。

しかし、匠が女性と思って付き合っているわけじゃないのは確か

にしても、伊吹くんはどうかわからない。

「だから、伊吹も違うって」

再びくくつと笑いながら私の思考を読む匠。

私は思わず唇を尖らせた。

「そんなのわかんないし。匠がそう思ってるだけで、伊吹くんは違うかもしれないでしょ。いくら匠でも乙女心の複雑な機微まではわかんないよ、きっと」

「乙女心ねえ……」

匠はそう言うと、ふつと笑って私を見つめた。

そして、ゆつたりと口を開く。

「たとえ伊吹が俺の事を女として好きだったとしても、俺が伊吹の事を好きになった時点で、伊吹は俺を好きじゃなくなると思うけど？」

「は？」

匠のよくわからない発言に、私は顔をしかめた。

そんな私を見て、匠は再びおかしそうにくくつと笑う。

「だって、意味がわからないんだもん！」

「そうでもないと思うけどな。伊吹が気に入る条件を考えると」

「条件？」

首をかしげた私に、匠は軽くうなずいた。

「そ、伊吹が気に入る人間には共通点がある。そのうち、愛良もそ

の中に入れてもらえと思うぞ?」

「何で?」

不思議がる私を見て匠は小さく笑うと、そのまま読書に戻った。

「ちよつとー! 気になるんだけどっ!」

それを知ったら、伊吹くんが匠と仲良くしていても不安にならな
いかもしれない。

それなのに話を終わらせようとした匠にむくれる私。

匠はくくつと笑うと、再び私を見た。

「そんなに知りたい?」

「うん。気になる」

「そうだな。それじゃ…」

そこまで言うと、匠はちらりと天井を見上げて少し何かを考える。
それから、私を見つめた。

「9・3・8・9・26・21・14・1・8・9・20・15」

「何それ?」

突然数字の羅列を口にした匠に、首を傾げる私。

匠は小説に視線を戻して、口元だけに笑みを浮かべる。

「それもわからないわけ?」

「…暗号」

「正解」

本当はわかりきっていた答えを言つと、くすつと笑い、小説のページをめくる匠。

どうやら、小説を読むだけの時間があると言いたいらしい。むっとするものの、確かに今のだけではしばらくわかりそうになり。

「つていうか、もう一回言つて」

さすがに暗記できるはずもなくそうお願いすると、匠はそばにあったメモに先ほどの数字を書いてくれた。

しかし、数字を見ただけでは何のことやらさっぱりわからない。

「ヒントは？」

少々悔しいと思いつつも、そう尋ねる私。

匠は小説を見たまま、くすつと笑う。

「26、かな」

「26？」

再び出された数字に疑問の声を上げたが、匠はそれ以上何もいわずに小説に目を走らせている。

これ以上のヒントはないらしい。

私は数字の羅列を見ながら、考えはじめたのだった。

第九話・乙女心へ解答編

「えーと、数字の問題で、ヒントが26って事は、多くても26までしか数字がないっていうことかな？」

そう言いながらちらりと匠を見ると、匠は本を読みながら頷いた。どうやら、あっているらしい。

「って事は、26個しかないものを現してる？」

再び頷く匠。

これもあっているらしい。

「暗号って事は解読したら言葉になるものでしょ。それで26個って事は…あっ！」

そこまで言ったらさすがに私でもわかった。

「26個で言葉になるものといったら、アルファベット！ようするに、数字に当てはまるアルファベットに置き換えればいいんだ！」

「じゃ名答」

匠はくすつと笑いながらそう言うと、パタンと小説を閉じた。そして、目を細めて私を見つめる。

「で、お答えは？」

「えーと、ちょっと待って。最初は9だから、A B C D E F G H…

「Iでしょ」

一つ一つ数えながら、数字の上にアルファベットを書いていく私。今回の暗号は簡単だったと思うが、アルファベットをさらにと数字に変換できたあたりがさすが匠だと思ったりする。

「えーっと…、I・C・H・I・Z・U・N・A・H・I・T・O。
一途な人？」

「正解」

数字をアルファベットに直したものを読み上げると、匠は口元に微笑を浮かべた。

「一途な…人」

もう一度呟きながら、答えの意味を反芻する私。

この答えは伊吹くんが気に入る条件だったはず。

この理由で匠は気にいられてて、そのうち私も気にいられるらしい。

一途って色んなものに使えるとは思うけど、匠が伊吹くんを好きになったら成立しないって事は、一途の意味するものは恋っていうことで、つまりは、匠が誰かを一途に想っているって事…。

「愛良、ちょっとはポーカーフェイスとか覚えたら？」

急にぼわっと赤くなつた私を見て、匠はたまりかねたように笑いながらそう言った。

「だ、だって!!」

「だって、何？」

赤面してうるたえる私とは対照的に、余裕の笑みを浮かべる匠。
絶対に、私の反応を楽しんでいる。

「た…、匠が何に一途だから気にいられてるの？」

少しは動揺してくれるかと言いつつ返してみたが、匠はくすつと軽く笑うだけ。

そして、目を細めてじつと私を見つめる。

「そんな簡単な問題もわからないわけ？」

「え…」

「俺は、愛良が誰に一途か知ってるけど？」

「っ……」

再びぼわつと赤くなる私。

私が『何に』と聞いたのに対して、『誰に』と返してくる辺りが小憎らしい。

自信ありげなその微笑がちょっと悔しいと思いつつ、でも、それが匠に似合ってるとも思ってしまう。

「なんで…伊吹くんはそのうち私を気に入るわけ？」

これ以上同じ話題をしたらゆでだこになりそうで、ちょっとだけ話を変える私。

と、匠は軽く肩をすくめる。

「今はまだ確認中なんだよ。愛良の反応を面白がりつつ、簡単に他になびかないかとか、相手を本当に信じられるかとか、試してる」

「そうなんだ…」

言われてみれば、そう取れなくもない伊吹くんの態度。
私に迫ってみたり、匠の事を好きな風に思わせぶりなことを言ったり…。

それでもやつぱり、伊吹くんが匠を好きかもしれないという可能性は残る気がした。

それに、一途な人が好きだとしても、自分の事を一途に思ってくれるようになればいいわけで、匠が伊吹くんを好きになるなら、伊吹くんはそれでいいのではと思ってしまう。

「それはないよ、愛良」

「それ？」

何も言っていないのにと、首をかしげる私。

匠はくすつと笑う。

「俺が伊吹を好きになったら、伊吹は幻滅するだけだよ」

「でも…って、人の思考を読むなー！」

思い切り言い当てられ、思わず赤くなる私。

匠は楽しそうにくくつと笑う。

「だって、愛良ってほんと顔に出るから」

「そんなことないもん」

友達にそんな事を言われたことはない。

匠だから、わかるだけだ。

「でも、好きになったら好きじゃなくなるって、なんか矛盾してな

い？」

話を戻してそう尋ねると、匠は再び小説を開きながら軽く肩をすくめた。

「さあね。でも、それが複雑な乙女心なんじゃないか？」
「むう……」

もっと事情を知っていきそうな匠だったが、友人のプライバシーをそれ以上語るつもりはないらしい。

この話は終わりというように、小説に目を通し始めた。
確かに、人の心の深い部分を勝手に色々聞きすぎるのもどうかと思う。

とりあえず、匠が暗号だとしても自分の気持ちを伝えてくれただけだよとするとすかない。

でも、もうちょっとはつきり聞きたいというのも乙女心というものである。

「ねー、匠」

そう言いながら、私は匠の隣のソファに移動した。
視線を、ちらりと私のほうに向ける匠。

「さっきの答え、やっぱりわからないから教えて？」

「さっきの答え？」

復唱した匠に、私はこくりと頷いた。

「そ。匠が一途なものって何？」

はつきり言ってほしくて、じっと見つめてみる。

「本当はわかってるだろ？」

「ううん。わかんない。だから教えて」

引き下がらずにそう言つと、匠は仕方がないなというような表情を浮かべ、小説を閉じた。

そして、目を細めて私を見る。

「じゃ、目をつぶって」

「え」

ドキツとしつつも、匠の言葉に従う私。

自分でも心臓の鼓動が聞こえそうなくらいドキドキしつつ、匠の答えを待つ。

そして、私の唇にそつと触れる温かな物…。

「…？」

なんだか違和感を感じ、私は恐る恐る目を開く。

と、目をつぶる前と同じ距離に、笑いを堪えた匠の顔があった。

そして、私の唇には匠の人差し指…。

「わからないなら、秘密って事で」

「えー！」

秘密のポーズなら自分の唇に人差し指だろー！と心の中で文句を言う私。

思いつきりだまされて赤くなった私を、匠は楽しそうに眺めている。

「だって、愛良も自分の口から教えてくれないんだろ？」

「そ、それは…」

「じゃ、おあいこって事で」

そう言うと、再び小説を読み始める匠。

いつも肝心なところではぐらかすけど、いつかちゃんとはっきり
言わせてみせるんだから！

第十話・言葉へ問題編

手紙を下駄箱の中にそつと置くと、私、橘愛良は軽い足取りで学校を後にした。

下駄箱の使用者は、幼馴染の横溝匠。

中に入れた手紙は、もちろん匠の好きな暗号だった。

今日は匠の誕生日。

私が何も言わなければ匠はいつもの如く私の父の経営する探偵事務所にきてミステリー小説を読みふけているだけなので、外での待ち合わせ場所を記しておいたのだ。

匠なら、絶対にわかって来てくれるはず…。

匠へ

H J A I P N P J Y Y B A I N R
I T G H O D J A I Y

ってるね。

待

愛良より

ヒントは何も書いていないが、今日が何の日か考えたらすぐにわかるだろう。

匠には簡単かもしれないが、普通に伝えるよりは喜んでもらえるはず。

そう思いながら校門を出たところで、私は見知った人物を見つけて足を止めた。

「愛良ちゃん、一人なんだ」

「伊吹くん…」

校門にもたれかかるように立っていたのは、匠の友人の赤川伊吹くん。

どう見ても美少年なので、通り過ぎる女子たちに羨望の眼差しを向けられているが、この人はあなたたちと同じ女子ですと教えてあげたい気分だ。

「今日くらい匠と一緒に帰るのかと思った」

誕生日だからと言いたいのだろう。

その口ぶりからすると、伊吹くんも匠と約束をしていないようだった。

「伊吹くんは、匠を待ってるの？」

「そ。呼び出してもなかなか来てくれないからね、匠は」

「そっか…」

確かに自分に興味のないことに関しては腰の重い匠。

伊吹くんでも同じなんだと思うと、なんだかちょっとほっとした。

「せっかく匠の欲しがってた物手に入ったからさ。匠の好きな作家の同人時代の幻の作品。見たらきつと喜ぶと思うんだけどね」

「そっか。きつと喜ぶよ、匠」

そう答えながら、私は匠へのプレゼントが入った鞆をぎゅっと抱

きしめた。

「愛良ちゃんは匠に何あげるの？」

「え。いや、別に大したものは…」

伊吹くんにそう問われても、そう答えることしかできなかった。

正直言つて、本当に大したものではない。

物欲のあまりない匠は、ミステリー小説以外欲しいものがあまりない。

かといって、匠のマニアックなミステリー好きについていけないわけでもない。

だから、プレゼントを比べたら伊吹くんがあげる物の方が、匠は絶対に喜ぶだろう…。

「へえ、そうなんだ。だったら、愛良ちゃん自身でもあげたらいいのに」

「んなつ！？」

伊吹くんのからかうような視線で冗談だとはわかったものの、かあつと赤くなる。

「ふふ。ほんと、愛良ちゃんっていいリアクションするよね。匠がからかいたくなるのもわかるなあ」

「あ、あのねえ！」

赤面したまま言い返そうとしたものの、伊吹くんの艶やかな笑みがさらに攻撃をしかけてきた。

「でも、冗談抜きでそのプレゼントもありだと思っけどな」「ないから！」

「そう？一番喜ぶと思うけどなあ」

「そんなわけないし！」

「どうして？」

「どうしてって…」

楽しげに尋ねられ、言葉に詰まる。

どうしてもこうしてもあつたもんじゃない。

「そんな事、できるわけないでしょ！」

「そんな事って？やだなあ、愛良ちゃん。何を想像したわけ？」

「は？」

にやりと笑った伊吹くんは、思わず固まる私。

「いちいち俺見て不安がつてるくらいなら、ハッキリ気持ち伝えればいいって意味で言ったんだけど？」

「え…」

「愛良ちゃんってば、意外とエッチ？」

「○\$ %x ~~~!!??」

声にならない叫びをあげてこれ以上ないくらい真っ赤になった私を見て、伊吹くんは肩を震わせながら涙目になるくらいひとしきり笑う。

少しして落ち着いた伊吹くんは涙を拭いてから、いまだ真っ赤なままの私を見つめた。

「相手から言ってくれるのを待つてるなんてずるいことしてないで、自分で行動おこしたら？それとも、怖いの？思った通りの答えが返ってこなかったらって」

「それは…」

「信じてないの？匠の事」

じっと見つめる伊吹くんの瞳を、私はただ見つめ返すことしかできなかった。

匠は、伊吹くんが私を試していると言っていた。

一途な気持ちが本物かどうか、試していると。

「私は…」

「あ、匠だ」

「ええ！？」

口を開きかけたところで伊吹くんの視線が私の後方に移り、話題の中心の人物の名を呼んだ。

あせって振り返ると、玄関を出た匠が歩いてくるのが見えた。

せっかく待ち合わせの手紙を置いてきたというのに、今ここで会うわけにはいかない。

「ごめん、伊吹くん。その話はまた今度！！」

私は伊吹くんにそう言うと、ダッシュでその場を離れたのだった。

第十話・言葉へ解答編

大きな木の幹によりかかるようにして立っていると、階段を上ってくる人影が見えた。

時間よりも少し早い時間。

長い階段をのぼり終えた匠は私の前まで歩いてくると、小さく息をついた。

「ずいぶんと体力のいる待ち合わせだな、愛良」

「匠は運動不足だから、たまにはいいでしょ？」

そう言い返すと、匠は軽く肩をすくめた。

「手紙、すぐにわかった？」

「当然」

匠は不敵な笑みを浮かべると、ポケットから私の手紙を取り出した。

「『H J A I P N P J Y Y B A I N
R I T G H O D J A I Y』。一見意味のない
アルファベットの羅列で、ヒントもなし。でも、ヒントがないとい
う事は、逆にわかりやすいヒントがどこにあるということ」

そこまで言くと、小さく微笑む匠。

「今日は俺の誕生日。ヒントはそう言うことだろ？そうになると、答えは簡単。このアルファベットの中から『HAPPY BIRTHDAY』を取り除けばいい。つまり、『JINJYANIGOJI』

。神社に五時だろ」
「う」名答

余裕綽々の講義は、即答できたことの証だろう。
これでも一生懸命考えてみたのだが、匠からしたら簡単だったに
違いない。

「バースデーカードも兼ねての暗号ね。愛良にしてはよく考えたん
じゃない？」

素直な言い方じゃないが、匠の柔らかな瞳は少し嬉しそうに見え
た。

「お誕生日おめでと、匠」
「ありがと」

そう言ってほほ笑んだ匠に、私は鞆からプレゼントを取り出し、
それを差し出した。

「あと、これ、プレゼント」
「さんきゅ。開けていい？」
「どうぞ」

包み紙を開ける匠を、私はドキドキしながら見つめる。
中から出てきたのは、手造りのブックカバー数種と、ブックマー
ク。

不器用な私が作ったので、少々見栄えが悪かった。

「へえ。ちゃんと文庫用とか、ハードカバー用とかに分かれてるん
だ」

「うん。だって匠、色んな本読むでしょ？」

「ああ。ありがとう。使わせてもらうよ」

そう言うと、匠はさっそく鞆から小説を取り出し、サイズのあうブックカバーをつけてくれた。

しかし、本につけてみると、さらに不格好さが目立つ。

「え、えーと匠。プレゼントしておいてなんだけど、恥ずかしかったらはずしていいからね！」

「なんで？別に恥ずかしくもなんともないけど？」

「む、無理なくていいから！」

「どうして？何も気にならないけどな」

「いや、絶対気になるでしょ！！」

だんだんと恥ずかしくなってきたて叫んだものの、匠は平然とした顔でそれを鞆の中にしまった。

それから、私を見つめてふっと口元に笑みを浮かべた。

「そんな事よりも、他に何かあるんじゃないのか、愛良？」

「あつ……」

自分で渡したプレゼントに動揺しすぎて忘れていたが、ここで待ち合わせした事には意味があった。

時間も重要だ。

「つて、あれ？」

その事については匠には何も言っていない。

それなのになんでわかったのだろうと不思議に思っで見つめると、匠は当然だというように勝ち誇った笑みを浮かべた。

それから、くくつと笑う。

「呆けてないで、移動しないでいいわけ？」

「ああ！？するする。移動する！！」

匠に言われ、私は慌てて移動した。

匠と私が向かったのは、高台にある神社の裏手の林の奥。

木々の間を通り抜けると視界が開け、街が一望できる場所があった。

そして、この時間は……。

「へえ。綺麗だな」

街をオレンジ色に染める夕陽を見つめながら、匠は嬉しそうに微笑んだ。

そう。今は沈みゆく太陽が、空を、街を幻想的に美しく染め上げる時。

大したプレゼントを用意できなかった私は、匠にこの景色をプレゼントしたかったのだ。

だから、この神社でこの時間に待ち合わせをした。

「ありがとう、愛良」

「うん」

優しく微笑んでくれた匠に、私の心はふわりと暖かくなった。

プレゼント自体の嬉しさなら、きっと伊吹くんのくれたものが数倍良いに違いない。

でも、私のプレゼントでも匠が喜んでくれているのがわかって、すごく嬉しかった。

「愛良」

並んで夕陽を眺めていると、匠が静かに私の名前を呼んだ。

「何、匠？」

隣を見ると、街並みを見つめたまま、匠はくすつと小さく笑う。

「暗号はともかく、待ち合わせ場所を探すの、実は大変だったけど？」

「へ？」

匠の言葉に、私は間の抜けた返答をした。
それを聞いて、くくつと笑う匠。

「え、なんでなんで？」

「愛良。この辺りに神社がいくつあると思う？学校の近辺にも、事務所や自宅の近辺にも、いろいろとあるんだけど？」

「え……」

自分にとっては神社といえばここだったのだが、どうやら知らない神社がいくつもあつたらしい。

ひよつとしたらここに来るまでいくつか神社をまわってきたのかと、ちよつと焦る。

しまったと思った私だったが、匠は沈んでいく夕陽を見つめながら、柔らかく目を細めた。

「ま、愛良の考えそうなことを推理したら、ここしかないと思ったけどね」

「え？」

匠はゆっくりと私の方に向き直ると、驚く私を見て小さく微笑んだ。

「愛良なら、俺に何かプレゼントしようと考えろ。で、この季節のこの時間に外で待ち合わせ。きっと、夕陽が綺麗に見える景色のいい場所だと推理したんだけど、違うかな？」

「正解」

どうやら、暗号一つでそこまでお見通しだったらしい。さすが匠だと思う。

「驚かせたかったのに、ばれちゃったね」

「そうでもないよ。こんなに綺麗だとは思わなかった。驚いたし、嬉しいけど？」

そう言って、再び景色に視線を向ける匠。

オレンジ色に染まった匠の横顔を見ながら、私は伊吹くんの言葉を思い出していた。

『信じてないの？匠の事』

信じていないわけじゃない。

ただ、素直になれないだけだ。

匠は人の事からかって楽しむし、素直じゃなくてかわいくない所も多々ある。

でも、こうやっていつも私の気持ちをわかってくれる。

私が作ったどんなにまずい料理でも残さず食べてくれるし、どんなに下手くそな手作りなものでも、恥ずかしがることなく身につけてくれる。

普通に誘ったら断ることも多いくせに、必死に考えた暗号だと、忙しくたつてめんどくさい場所だって、必ず来てくれる。結果じゃなくて、私の込めた想いを受け止めて、大切にしてくれる匠。

いつもいつも、優しく私の心を包み込んでくれる。

「匠」

名を呼ぶと、匠は顔をこちらに向けた。

匠と、目が合う。

それは、夕焼けがもたらす幻想的な風景のせいか、伊吹くんの言葉のせいなのか分からない。

でも、いつもよりももっと、匠への気持ちが溢れていて止まらなかった。

優しく私を見つめる匠への想いが、抑えられなくなる。

ずっとずっと心にあったけど、何となくは伝えたこともあるけど、でも、ハッキリと口にはした事のない大切な言葉。

今まで素直になれなくて、ただ待っていたただけけど、今なら言えそうな気がした。

「匠…。私…私ね、匠の事…」

喉まで出かかっているのに、最後の一言が、大切な言葉はなかなか口に出れなかった。

一度、心を落ち着けるように眼を閉じる。

それから決意して目を開けると、ずっと匠の手が私に向かって延びていた。

匠の指が、私の長い髪に優しく触れた。

それから、匠の瞳が近づいてきた。

そして、反射的に目を閉じることもできないくらい驚いた私の唇

に、匠の唇が触れる。

「!?!」

暖かな感触に、ようやく我にかえって目を閉じる私。

今度は、実は指だったとか、違う場所だったとかは、絶対にない。間違いなく、匠から私へのキス…。

たぶん、本当は数秒だったんだと思う。

でも、永遠に感じられそうなほど、長く感じられた時間。

匠はゆっくりと唇を離すと、そのまま壊れ物に触れるようにそつと優しく抱きしめてくれた。

そして、高鳴る鼓動でかき消されそうなほどの小さな声で、耳元でそつと囁く。

「好きだよ、愛良」

「!?!」

からかうような声じゃない、優しい囁き。

今まで冗談や暗号などでは伝えてくれたけど、こんな風に自分の口で、ハッキリと言葉にしてくれたことのない、匠の気持ち。

嬉しくて、匠の腕の中で涙があふれてきた。

匠がそう思ってくれてると、感じてはいた。

でも言葉で伝えてくれることが、こんなに嬉しいとは思わなかった。

「愛良。俺が、先に言わせるとでも思ってた?」

耳元で、くすつと笑う匠の声。

どうやら、私が言おうとしたので先手をうたれたらしい。

ほんの少し離れて匠の顔を見ると、楽しそうな瞳で私を見つめて

いた。

「泣くところじゃないと思うけど？」

「だって！」

むうっとむくれた私を見て、くくつと笑う匠。
すっかりいつも通りだ。

でも、この流れに負けてはいけない。

私からは、まだちゃんと言ってない。

このタイミングを逃したら、またいつまで経っても言えない気がした。

「匠。私も好きだよ」

思い切ってそう言うと、匠は柔らかに目を細めた。
しかし、次の瞬間には不敵な笑みに変わる。

「知ってる」

「か、かわいくない！！」

余裕綽々の態度に思わずそう叫ぶと、匠は実に楽しそうに肩を震わせて笑い始めた。

「愛良って、ほんといいリアクションだよな」

「あのねー、匠！私がせっかく！！」

ぽかっと匠の胸を叩くと、匠は優しい瞳で私を見つめる。
そして、ゆっくりと口を開いた。

「わかってるよ、愛良の事は全部」

「っ…」

匠の言葉に、思わずかあっと赤くなる。
わかつてはいるが、匠には色んな意味で敵わないらしい。
私を嬉しくさせる方法も、ちゃんと知っているのだ。

「さ、日も沈んだ事だし、そろそろ行くか。愛良の作った個性的な御馳走、待ってるんだろ？」

そう言っ、匠は私の背に回していた手をはなした。

「個性的っ、匠…」

自覚しつつもむっとすると、匠は穏やかに微笑んだ。
そして、私の手を取る。

「ほら、いくぞ」

「…うん」

匠の手が暖かくて、声が優しく、私は再び笑顔に戻った。
いつも、私を幸せな気持ちにしてくれる匠。

今度は絶対、匠も予想できないくらいの方法で、匠を喜ばせてみせるんだから！

第十話・言葉へ解答編（後書き）

また番外編や続編を書くかもしれませんが、ここまででひとまず完結です。

最後までお付き合いくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7193j/>

Devinette

2010年10月8日12時37分発行